

この記事は、p.1～3については生徒が作成しています。

## SSH生徒研究発表会に参加しました！

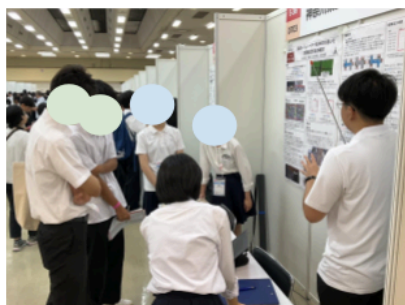
私達は8/5～8/7に兵庫県神戸市の神戸国際展示場にて行われた、令和7年度SSH生徒研究発表会に参加しました。

SSH生徒研究発表会とは、全国からSSH指定校・経験校がおおよそ240校程集まり、各校生徒がその研究成果を発表するというものです。研究内容は「数学・情報」「物理・工学」「化学」「生物A(動物・医学)」「生物B(植物・農学)」「地学」に分類されています。

今回、私達は「数学・情報」分野において発表しました。



神戸国際展示場に到着した様子とブースの様子



発表の様子



学年の先生に来ていただきました！

## 感想・振り返り

### ☆参加生徒1☆

今回の発表会は、自分にとって実りある経験となりました。各校が独自の課題を設定し、その解決策を研究し、実用化、さらには社会実装まで見据えていることに、大変刺激を受けました。

発表全体を通して印象に残ったのは、他校の発表者の方々が「なぜ？」「もっと知りたい！」という素朴な好奇心や「もっと簡単に・安くできないのか？」といった純粋な探究心を原動力に、独創的な発想や仮説を立て、それを丁寧に検証している姿でした。AIを活用した研究、自作ソフトウェアによる解析、膨大なデータを丹念に積み重ねた研究など、時代の流れを捉え、社会の課題解決や知の探究に挑む多様なアプローチとその熱意に感銘を受けました。さらに、得られた成果を楽しそうに発表する様子は、知の探究者としての理想の姿であると改めて感じました。

また、発表中には多くの方々からご質問やご意見をいただき、深く有意義な議論ができたことを嬉しく思いました。多くの方に私たちの研究内容を知っていただくことがこんなにも楽しいものだと思再認識しました。自身の力不足を痛感する場面も今までに多々ありましたが、この発表会でしか得られない貴重な学びや気づきを数多く得ることができました。

特に、「不明瞭な未来を予測するのではなく、自ら未来を創造していくことこそが重要である」という旨のお話に心を打たれました。自分は未来を予測することに意識が向いていましたが、ただ予測するだけでは将来起こりうるすべての事態に対応できるわけではないと気付かされました。この貴重な学びは、これからの人生においても必ず活かせると信じ、自身の好奇心と共に、未来を創造する意欲をもって頑張りたいと強く思いました。

最後に、今回引率していただいた先生方、ご指導いただいた先生方、ついてきていただいた2年生の皆さん、そしてここまで自分を連れてきてくれた仲間たち、本当にありがとうございました。

### ☆参加生徒2☆

今回の発表会で、非常に貴重な経験をさせていただきました。生物・地学・化学・数学・情報など、幅広い分野にわたる研究が発表されており、どの内容もレベルが高く、非常に興味深いものでした。一つひとつの研究に込められた探究心や、仮説を立てて実験を繰り返す姿勢から、多くの刺激を受けました。「研究は一度で終わるものではなく、常に問いを持ち続け、深めていくもの」ということを改めて実感し、今後の人生においても大きな糧となる学びを得ることができました。このような機会をいただき、本当にありがとうございました。

### ☆参加生徒3☆

私たちの研究では、渋滞の原因を分析する過程や仮説が非常に複雑で、一度の説明で相手に理解してもらえるよう、ポスターの構成や説明の仕方を工夫しながら、何度も修正を重ねました。そのこ

ともあり、本番の会場で発表を行った際、聞きに来てくださった方々がうんうんと頷きながら聞いてくださる姿を見て安心しました。

発表会では、高価な実験器具を高校生でも扱えるように、安価で高精度なものを自作する研究や、身近な材料を活用する研究など、実用化を視野に入れた取り組みが多く、感銘を受けました。

特に印象的だったのは、難しい内容をわかりやすく伝えようとする姿勢や、実物を用いて発表する工夫です。研究を行うだけでなく、それを発信し、より多くの人に知ってもらいたいという熱意に強く刺激を受けました。

今回の発表会を通じて、ひとつの研究を深く掘り下げるだけでなく、研究の先まで見据えて探究していきたいと強く思いました。このような貴重な機会をくださった先生方、そして私たちの研究・発表に関わってくださったすべての方々、本当にありがとうございました。

#### ☆参加生徒4☆

本研究は、厚木市役所の方に協力していただき、公的な調査による非常に細かい数字を用いることで交通シミュレーションを作成することが出来ました。地域の身近な課題に触れ、研究する機会を頂けたことはとても貴重であったと考えています。また、東京大学大学院情報理工学系研究科ソーシャルICT研究センター 伊藤 昌毅先生には、全く知識を持っていなかった私たちに専門的なシミュレーションや交通工学の知識にとどまらず、発表用のスライドや、より伝わる発表方法など大学教授の視点からご指導して頂きました。私たちの研究は今回の発表会にて一区切り付くことになります。本研究に協力してくださった厚木市役所の方々、伊藤昌毅先生に深くお礼申し上げます。

#### ☆参加生徒5☆

今回の発表会では、私にとって非常に学びのある経験をさせていただきました。

日本中のSSHの指定校から来た、発表内容の分野も異なるような生徒が集まって発表をする、というめったにない機会に、様々な発表を聞いていく中でとても刺激を受けました。どの研究も、発表を通して、どれだけこの研究に時間をかけてきたのか、どんな努力をしてきたのか、この研究からどんなことに役立てていきたいのかなど、その研究内容に対する熱意が伝わってきたことが特に印象的でした。

また、発表の中には自分が全く知らないような研究内容のものも多くありましたが、そんな自分でも内容が理解できるくらい発表の仕方がよく工夫されていて、ポスターの構成や発表の伝え方など、今後の参考になる部分も多く見つけることができました。

この発表会のために関わってくれた先生方や先輩方、本当にありがとうございました。

～引率教員Mより～

今回発表した班は、厚木高校78期ヴェリタスⅡ全97班から選ばれた厚高代表班です！当日も丸一日のポスター発表でとても大変な中、よく頑張りました！

以下、全体振り返り。

1. 入賞は逃したが、得るものが多かった

結果としては入賞には至らなかったが、他校の取り組みや審査の傾向を知ること、今後の研究活動に活かせる多くの学びがあった。(79期以降の後輩に還元します！)

2. 高校生らしい発想や着眼点が重視されている

大学レベルの専門性よりも、高校生ならではの柔軟な発想やユニークな視点が評価される傾向。テーマ設定の動機や背景にも注目が集まっている印象。

3. 実験量・フィールドワークの多さが目立つ

受賞校は、実験や観察の回数が多く、現地調査などのフィールドワークにも力を入れている。実践的な活動の積み重ねが説得力を生んでいる。

4. 試行錯誤のプロセスが評価される

一度の成功よりも、「失敗→考察→再挑戦」というプロセスが重視されている。

研究の過程で得た気づきや改善点を活かした取り組みが高く評価されている。

といった印象でした。

～引率教員Iより～

SSH生徒研究発表会への参加は、前職も含めて、今年度で8回目。全国のSSHの学校が一つの会場に集い、お互いに気付きを得る機会をもてるのは、とても貴重でかつ意義ある経験といえます。SSHの課題研究では、研究テーマのきっかけとなる分野は、自然科学、社会科学、人文科学、芸術、スポーツなど様々です。ただし、より説得力ある研究とするためにも、データ解析や実験、統計学的処理など、自然科学的な視点を取り入れることが求められます。こうした中で得られた経験は、将来どのような進路に進むにせよ、様々な場面で生かせるときが来るはずです。

今回の経験が、すべての教科・科目を学ぶ意義や大切さを感じることに繋がるとともに、持続可能な社会の創造に向け、さらなる探究心をもってこれからの時代で活躍することを願っています。